

来週の『売り物』記事はこれ



2016年3月18日号

毎日新聞東京本社 編集局・販促宣伝部

公的資金完済 りそなが歩んだ12年

20日(日)



昨年6月に総額3兆円超の公的資金を完済したりそなホールディングス(HD)。2003年に経営難から公的資金を投入され、事実上国の管理下に置かれました。JR東日本副社長から転身し、りそな再建を託された故・細谷英二会長は「銀行の常識は世間の非常識」とぶち上げ、財務の抜本改革に加えて業務のあり方や組織、風土、意識などあらゆる面の変革を迫りました。支店の営業時間を午後5時まで延ばし、頭取・行員の呼称を廃止して社長・社員に改変。客の待ち時間を短縮するため手続きの電子化に注力し、全社員の給料3割カット、約5000人の人員削減など血のにじむリストラも断行しました。細谷氏と、その遺志を継いだ東和浩・りそなHD社長らが歩んだ12年の内幕に迫りました。



日曜朝は『S』で始まる——。ストーリーにご期待下さい。

「高浜原発再稼働ノー」の大阪地裁仮処分決定

原発運転を初めて停止させた判断の意味とは？

夕刊2面特集ワイド 22日(火)



関西電力高浜原発3、4号機(福井県高浜町) =写真=を巡り、隣県の滋賀県内の住民が運転の差し止めを求めた仮処分申請で、大阪地裁は今日9日、申し立てを認める決定を出しました。「安全性確保について(関電側は)説明を尽くしていない」というのが理由で、稼働中の原発の運転を停止させる仮処分決定は初めてです。原発を巡る訴訟では従来、国側の審査など「専門家の判断」を尊重して住民側の訴えを退けるケースが続きましたが、今回の決定で司法判断の流れが変わるのでしょうか。決定の意味を読み解きます。

センバツ開幕

20日(日)から12日間

第88回選抜高校野球大会(毎日新聞社、日本高校野球連盟主催)が20日に開幕します。全国の頂点を目指す32校が12日間(準々決勝翌日の休養日を含む)の熱戦を繰り広げます。開会式は西野カナさんの「もしも運命の人がいるのなら」で入場行進。初出場・小豆島(香川)の樋本尚也主将が選手宣誓をします。

開幕試合は福井工大福井(福井)と智弁学園(奈良)が対戦。史上3校目の連覇を狙う敦賀気比は青森山田(青森)と第6日第1試合で対戦。ともに甲子園優勝監督が率いる明德義塾(高知)と龍谷大平安(京都)の好カードは第2日第2試合です。昨秋の明治神宮大会優勝校で第1回センバツ覇者の高松商(香川)は初出場のいなべ総合(三重)と第5日第2試合で対戦します。



夢舞台での球児の活躍を、毎日新聞でお楽しみください。

企画「神の山よ～マナスル登頂60年」 22日(火)から5回



1956年5月9日、毎日新聞社と日本山岳会の登山隊が世界初のマナスル(8163m・世界第8位)登頂に成功しました。アジア初の8000m超級峰登頂は、敗戦の爪痕が残る日本の戦後復興を象徴する快挙として国民に自信と感動をもたらしました。あれから60年。日本の登山人口は1000万人を超えて、登山は「庶民の娯楽」に定着しました。登頂計画が持ち上がった経緯や背景、2度の失敗を乗り越えて登頂を果たすまでの労苦など関係者の証言を織り交ぜながら60年前を振り返ります。また、登頂成功が外交や産業など各方面に大きな影響を及ぼしたこと、登山ブームをもたらす先駆けになったマナスル登頂の今日的意義などを検証します。毎日新聞社は5月8日、記念イベント「ザ・マナスル・デー」、ネパール震災復興イベント「ザ・ネパール・フレンドシップ・デー」などを実施します。

「女の気持ちをたずねて」 おんなのしんぶん 21日(月)

「くらしナビ」面で連載している「女の気持ち」に投稿した読者を訪ね、その後の様子などを描く人気コーナー。今回は、埼玉県戸田市の野本洋子さんを、論説室の野沢和弘論説委員が訪ねました。

脊椎カリエスを患っている母(94)を、中学生の頃から看病している野本さん。長年の看病で苦勞も絶えませんが、理解ある夫や子供、孫に囲まれ、前向きに過ごしています。「何が起きてても自然体で受け止めていると、助けてくれる人が目の前に現れる」とも。ぜひ、お読みください。



連載「がん社会はどこへ」 5部 くらしナビ面 24日(木)から3回



がん患者が、自分らしく暮らしやすい社会を作るにはどうすればよいのか、現状・課題を見つめ、解決策をさぐる連載「がん社会はどこへ」の最終シリーズです。今回は、患者同士でもなかなか表だって話せない「性」にまつわる課題を取り上げます。乳がんや乳房を切除するなど外見の変化が心に及ぼす影響や、自分らしく生きるための心の持ちようなどを取り上げます。

女性が活躍する社会とは――

ノルウェー国会議長 オーレミク・トンメセンさん

オピニオン面 [そこが聞きたい] 23日(水)

女性の社会進出が当たり前のように語られるようになりました。来月1日には、女性活躍推進法が施行されます。けれども、その実情はお寒い限りです。たとえば衆院議員に占める女性はわずか1割足らず。一方で、閣僚の半分以上が女性という国があります。北欧ノルウェーです。男女平等社会の理想的な見本とされています。ノルウェー国会議長に、話を聞きました。

時代が見える――。オピニオン面にご期待ください。



本当の補償、救済とは

朝刊文化面 26日(土)



批評家の若松英輔さんが各界の識者で行う対談「理想のかたち」。最終回のゲストは、水俣病認定申請患者協議会の元会長で、漁師の緒方正人さん＝写真＝です。緒方さんは1985年、悩み抜いて水俣病の認定訴訟を取り下げ、その思いを著書「チツソは私であった」にまとめています。お金による「補償」や「救済」で終わらない本当の問題とは何か、じっくり話し合います。